

韓国薬学研修報告 ～漢陽大学での講義について～

澤田 真希

薬学部4年 10A072

今回の研修は9/8～9/11までの日程で行われました。研修は2日目と3日目に行われました。2日目は漢陽大学校大学病院にて薬剤部見学、ソウル韓方市場見学、韓国伝統文化体験をしました。3日目は漢陽大学 ERICA キャンパスにて4年生の薬物学の講義、調剤薬局訪問、薬学館見学、同 ERICA キャンパスにて大学院の臨床薬学の講義を体験しました。その中でも私は4年生の薬物学の講義と大学院の臨床薬学の講義について報告します。



この写真は4年生の薬物学のイム・ヒョンシン教授の講義風景です。講義はすべて母国語の韓国語で行われていました。時間は70分間で今回は RAAS (レニン・アンジオテンシン・アルドステロン系) について行われていたので、本校でいう機能形態学にあたると考えられます。その講義の中では RAAS だけではなく ACE (アンジオテンシン変換酵素)、アンジオテンシンと関連させて、ACEI (アンジオテンシン変換酵素阻害薬) や ARB (アンジオテンシンII受容体遮断薬)、さらには他の種類の降圧薬についても講義されていました。日本の講義では習わなかった薬品名も出てきていました。日本と外国では使われている薬品が異なることを改めて知ることが出来て良かったと思いました。

スライドについては日本と同様にカラフルでしたが、学生に配布されているスライドは白黒であり、本校の授業で学生に配布されるものと比べると簡素なものでした。しかし書き込みスペースが多く、この点はとてもいいと思いました。また授業の雰囲気は和やかで、さらに

約30人という少人数ということもあってか自由に質問がされていました。学生数が多い日本の薬学部ではなかなか実現が難しいところだと思いました。



この写真は大学院のチェ・キョンシク教授の講義風景です。講義は英語で PBL (Problem Based Learning) について行われました。講義は30分程度の短いものでした。講義内で PBL について簡単な説明がなされ、その後患者の症例が提示され、それについて考えを書き Eメールで送信するという宿題が出されていました。

大学院は大学とは異なり、知識を得るというよりも自分で考えるということが主体となるのだと感じました。今回は PBL でしたが、他の講義ではどのような内容で行われているのかとても興味が沸きました。また機会があればぜひ受講したいと思いました。さらに授業をくださった教授の方が長年 USA で薬剤師をされていた方で、その経験を自国の学生に伝えられることは大変素晴らしいと思いました。やはり、医療システムは違えども外国の医療を知ることはこれからの自国の医療の発展のためには非常に良いことだと思いました。

また今回は漢陽大学の学生と交流する機会をいただきました。交流会では、お互いの共通言語である英語で会話しなければならないということだったので少し心配でしたが、とてもフレンドリーな方々のおかげでなんとかコミュニケーションを取ることが出来て本当に楽しい時間を過ごすことが出来ました。

韓国の食べ物の話、好きな科目の話などいろいろな話をすることが出来ました。これからも交流を続けていき

たいと思います。さらに、このような機会があればぜひ参加したいと思います。



最後に

今回、大学からの韓国研修に参加させていただいて韓国の医療現場を見ることが出来たことはとても貴重な経験になりました。当たり前ですが外国の病院、薬局、授業を見させていただく機会などふつうは与えていただけないからです。韓方市場にも行かせていただきましたが、日本の漢方市場へ行ったことがないのでぜひ行って韓国との違いを感じてみたいです。さらに現地の学生と交流する機会を与えていただいたことも大変忘れがたい経験となりました。